

移住者日記

✍ No.12

葛尾村 菊池 未央 様



私はいま、葛尾村で暮らしながら、夫とともに任意団体 moco を立ち上げ、子育て支援の活動を行っています。保育の現場を離れた今だからこそ、自由に好きなように動いている、その時間を大切にしています。もし現役の保育士として働き続けていたら、目の前の仕事に精一杯で、地域で新たな一歩を踏み出す余裕はなかったかもしれません。葛尾村に移住し、少し立ち止まる時間があつたからこそ、今の形にたどり着くことができました。

移住のきっかけは、次男が中学卒業後に相馬市で漁師になると決めたことでした。中卒の息子を他所様に預けて本当に良いのだろうか、そんな迷いが何度も頭をよぎりました。親としてはせめて高校には進学してほしいという思いもあり、葛藤もありましたが、それでも最後は本人の意思を尊重することを選びました。だからこそ私たちは、何かあつたときにすぐ助けに行ける距離でありながら、近すぎず遠すぎない場所を探し始めました。その中で出会つたのが葛尾村でした。

現在は、一般社団法人葛尾むらづくり公社で、ふるさと納税業務や「葛尾みんな食堂」という地域の子どもや大人と一緒に食事を楽しみ、支え合う場所の運営を中心に担当しています。実際のところ、日々の仕事の割合はほとんどが一般社団法人葛尾むらづくり公社の業務です。そのかわりで、任意団体 moco の活動として、月に 1 回程度、田村市で出前保育を行っています。保護者の方の相談に乗ったり、お子さんと一緒に遊んだり、小さな積み重ねではありますが、これまで保育士として約 30 年働いてきた経験が、今の活動の土台になっています。

出前保育の参加者が少ないと感じることもありますが、それは保護者の皆さんに、ほかに安心して過ごせる場所や相談できる人がいるということかもしれません。それはそれで喜ばしいことです。必要とされる形は変わっていくものです。需要がなければ、また違う形を考えればいい、そうやって続けていくことが、今の私たちにはちょうど良いと感じています。

私には 4 人の子どもがおり、一番下の娘は 11 歳です。葛尾村への移住を伝えた当初は「絶対に行かない」と言っていました。大人数の学校から少人数の複式学級へ転入することになりますので、戸惑いは大きかったと思います。先日、唯一の同級生が転校し、自分が担う役割も増えたようです。悩みやストレスもあるようですが、葛尾村の学校では先生との距離が近く、自分の思いを直接伝えられる環境があります。今は娘の愚痴を聞きながら、小さな成長を見守っています。

放射線について、全く不安がなかったと言えば嘘になります。東日本大震災の後、私たちは家族で福島県内を見て回りました。立入り可能な地域を実際に訪れ、津波によって家が流された様子や壊れた住宅の姿も子どもたちに見せました。状況を理解することが大切だと思ったからです。葛尾村ではモニタリングポストによって放射線の量が「見える化」され、数値を自分の目で確かめることができます。すでに帰村している方も多く、戻らない理由が放射線だけではないと感じられたことも後押しになりました。

冬の葛尾村は、星が本当にきれいです。薪棚のある庭から見上げる夜空は格別で、「こんなに星が見えるんだ」と驚きました。初夏にはカエルの鳴き声が響きますが、今ではそれも心地よい自然の音です。これからも葛尾村で、自分たちらしい歩幅で歩んでいきたいと思っています。